

# 2014 年度 センター試験 日本史B (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：6 題	解答数：36 問	
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ○ やや難化	● 変化なし	○ やや易化 ○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加	● 変化なし	○ 減少
出題分野の変化	○ あり	● なし	
出題形式の変化	○ あり	● なし	
新傾向の問題	○ あり	● なし	
<p><b>総評</b>          形式も難易度も一般的な問題ではあるが、受験生にとって不慣れなテーマや図版に戸惑ったかもしれない。図版問題に関しては写真（7 点）・地図（2 点）・史料（6 点）・表グラフ（2 点）と、昨年の増加傾向をさらに上回る分量であった。さらに、時代配列問題や出来事の年代からグラフを分析させる問題が増加しているため、単純な歴史用語の暗記だけでは対応できず、時代概況の把握力が求められていた。</p>			

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	古文書を中心とした資料	12 点	古文書をテーマにした問題で定番の会話形式からの出題。写真は設問を解く上では不要であったが、グラフ問題は選択肢の年代が判別できないと解答できないところが少々難しかった。
第 2 問	原始古代の社会・国家と交通との関係	18 点	冬期テーマ史ゼミで予想した通りの交通史からの出題。盲点となりやすいテーマであることに加え、地図・史料・時代配列問題など出題形式が多様であった。しかし、設問は標準的なレベルであるためぜひ高得点を狙いたい。
第 3 問	中世の政治・経済・文化	18 点	鎌倉・室町時代の政治・経済・文化の混合問題。小問ではあるが、4 年連続日明貿易が出題された。東大寺焼き討ちとその再建事業、一向一揆や五山文学などが出題されており、中世の文化史が頻出であることを裏付けた。
第 4 問	近世の文化・外交	17 点	ある医師の旅行記や漂流民を題材とした文化・外交に関する問題。しかし、設問は第 2 問同様の交通や流通に関するものが多かった。未見史料が使用されたが、特に読み取りが必要な問題ではなかった。
第 5 問	明治期の租税制度	12 点	近代頻出の経済史からの出題。表の読み取りは、選択肢と表を照らし合わせれば容易に解答できる問題であった。しかし、第 1 問のグラフ読み取りと同様に年代の判別が必要であった。
第 6 問	手塚治虫の生きた時代	23 点	近年のセンター試験に頻出の人物史。手塚治虫が題材となっているが、その人物に関する知識が必要なのではなく、その生きた時代を問う問題。図版が使用されているが、設問には関係なかった。戦後史は、第 1 問の設問も含めて 4 題出題され、昨年（2 題）より増加した。